真を参議院会館宛に送付、返信は極めて丁寧な大鷹議員からの電話であった。「小姐」はまちがいなく李香蘭であること、梅原龍三郎画伯のモデルになった様子は、新潮社から出している「李香蘭私の半生」にくわしくかいてあること、その時描かれた作品のうち一枚は本人が所蔵しているが、もう一枚の方はどうなっているか全くわからなかった。どうして別府市美術館に収蔵されたのだろうか。等々、かつての「李香蘭」大鷹淑子女史の溌剌とした声を耳にすることができた。翌日速達便で「李香蘭私の半生」が届けられた。

梅原龍三郎はこの時期毎年中国を訪れ、「北京時代」といわれる多くの秀作を残しているが。紙に油彩で描いたり、日本画材を用いた独特の画報で制作しているが、「小姐」にもその特色がよく出ている。昭和一七年、女優李香蘭二二歳、日本では上映されなかった「黄河」の撮影が終った秋、北京飯店でモデルとなっている。東京国立近代美術館の「北京秋天」、長岡近代美術館の「紫禁城」などが同じこの秋に描かれた。

別府における石器人

安部和也

人類の祖先がこの地球上に誕生したのは、三百万年から四百万年前といわれており、猿人・原人・旧人の過程を経て新人と言われる現代人に進化したのである。日本最古の人類の痕跡が宮城県高森遺跡で発見されたと、五月十三日付けの新聞に報道された。それは『出土品は石核や石片を加工して刃を付けた石器で、発見された地層の火山灰堆積順序や、年代測定などをした結果、北京原人とほぼ同じ約五十万年前のものである』と

大分県下では、丹生・早水台の両遺跡が、十数万年前のものと言われていたが、最近になって考古学者の間では、丹生遺跡の出土品は石器に相違ないが、出土した地層に問題があり、又、早水台遺跡から出土した石器は、石と石とが自然現象によってぶっつかりあって出来た石器に似た物で、人間が加工した物ではないとの説が発表

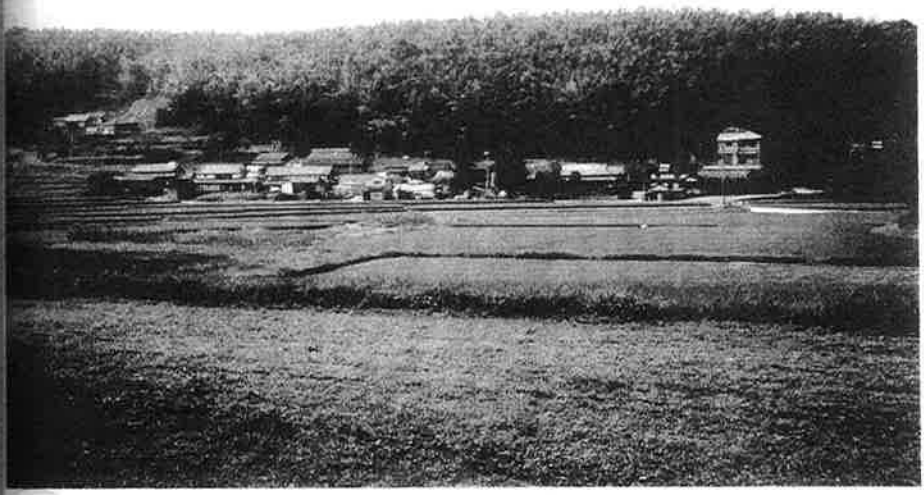
され、問題になっているとの事である。

では、別府における最古の人類痕跡は……

別府市教育委員会・別府市文化財調査員会発行の別府市周知遺跡一覧表によると、大所遺跡・扇山遺跡となっている。出土品を見るに、大所遺跡の旧石器時代の物に対し、扇山遺跡は旧石器・縄文時代の物が出土している。大所には旧石器人は住んでいたが、縄文人は住まなかった事になる。

何故だろうか……考えられることは、遠くは由布鶴見の両岳に、近くは塚原十文字原の高原に降った雨は、地下に浸透して伏流水となり、西北を十文字原高原に抱かれた大所で地表に湧出していた。その伏流水が、由布鶴見の噴火によって地底に変化が生じ、それが原因で湧出が止ったため、人間が住めなくなったものと考えられる。

其れを裏付けるかの様に現地調査の時、話を聞いた藤原氏によると『大所は昔より水の出ない所だと先祖より聞かされていた。近年、そんな事があるかと水源確保のためボーリングを試みたが矢張駄目だった。現在は部落全戸十文字原の水源から引いている』と。



別府市大所遺跡

その大所に住んでいた旧石器人とは、どんな人間か、何処から来て、どんな環境の下で、どんな生活をしていたのだろうか…少し考えてみる。

大所遺跡は大字南畑の県道別府－山香線大所停留所東南側一帯の平地で現在は大所住民の営農地になっている。出土したナイフ形石器・細石器・石鏃等によって、後期旧石器時代で、今から約四万年から一万年前のものと云われている。

旧石器時代とは、人類の誕生から約一万年前に至る夢のような長い期間で、その間に地球全体が寒冷気候になる氷期が四回と、温暖な気候の間氷期が三回あり、旧石器時代の終わり〔約一万年前〕と同時に第四回目の氷期が終わった。地球全体の気候は段々と温暖化に向い、北半球の広い範囲を覆っていた氷が解けて海水となったため、それまで大陸と陸続きであった日本は、津軽海峡・宗谷海峡・間宮海峡・対馬海峡・朝鮮海峡によって大陸と引き離され、現在の日本列島が出来たとされている。

間氷期の海水面の最高上昇記録を調べてみたが、資料不足で分らず、ただ『原日本人』の中には次ぎの様に記されている。「縄文時代前期の海水面の上昇を関東平野で云うと、利根川沿いに内陸部まで深く海が侵入していた。東京は上野と板橋を残してあとは全部海底であった。」と、今より七百年前の鎌倉時代以前の潮位は、現在より約二〇メートル高かったとするのが、海洋学者の常識とされている。そうなると当時の別府の潮位は、浜脇中学・河内渓・小百合愛児園・朝見病院・水道橋・税務署・野口病院・石垣南公園・春木小学校を結ぶ線となる。

建久七年〔一一九六〕大友能直の豊後入国は、現在の雲泉寺橋付近に着船し南立石に向かったと云う説があるが、潮位が上昇していた時代の事で当然考えられることである。

氷期の時の海面の低下は、現在の海面より最高で百二十米とされている。別府湾は速吸瀬戸を除いて全部陸地となり、九州・四国・本州とは陸続であった。

旧石器時代を前期・中期・後期に分類すると、今から約八万年前以前を前期旧石器時代。約八万年前から約四万年前までを中期旧石器時代。約四万年前から約一万年前までを後期旧石器時代と一般的に区分している。

後期旧石器人はピグミーなみの低身長で、男姓は一五〇センチ前後、女姓は一四〇センチであったとされる。彼らは二五人から五〇人程度の小集団を形成し、獲物を求めて常に流浪しており、一ケ所に定住することはなかった。それは彼らが農業も牧畜も知らない狩猟民で、野生動物の狩猟がただ一つの食料獲得の手段であったからである。獲物が捕れなくなると集団で、獲物が捕れる新天地を探して移動しなければならなかった。

大所遺跡は後期旧石器時代最後の氷期時代に出来たものとされており、北半球の広い範囲の海水が氷結し、内陸部でも高地は氷河に覆われたので、海水面の低下は一二〇メートルに達したと推定されている、その結果、九州四国本州北海道は一つの陸地となった。津軽海峡・宗谷海峡・間宮海峡も陸地となり対馬海峡・朝鮮海峡は部分的ではあるが海底が姿をあらわし、日本は南北で大陸と陸続きとなり、大量の動物群が押し寄せてきた事が判っている。北からマンモスゾウ。一方中国大陸からナンマンゾウ・シカ・オオツノジカなどの草食動物が、陸地化した黄海・朝鮮半島を通って西日本一帯にひろがった。

人間も又、動物を追って大陸から来たとされているが、では何処から来たのだろうか。そのルーツは……東南アジア説。揚子江流域説。黄河流域説。シベリア説等あるが、日本人の遺伝子はバイカル湖周辺の民族（北方蒙古人）の遺伝子に大変良く類似しているので、遺伝子学上は、バイカル湖周辺地方から沿海州・サハリン・北海道を経て東北日本に入ったものと、朝鮮半島経由で九州を始め西南日本に入ったもの等が、日本人のルーツとされている。おそらく大所の石器人は朝鮮半島を経由して、九州に到着したバイカル湖周辺の民族と思われる。

旧石器時代後期の気温は、現在より約七度乃至十度ほど低かったと言われている。一年を通じて当時の大所の気温は、現在の北海道札幌辺りと同じと考えられ、冬を除いてはかなり住み易かったと思われる。大所一帯は針葉樹林と広葉樹林の混合樹林帯で、モミ・マツ・ブナ・サワクルミ・カシの群生林と大草原が広がっていったと想像される。

当時、どんな動物がいたのだろうか……

由布鶴見の火山活動の影響を受けるこの地方には、ナウ

マンゾウのような大型動物は他所に避難して、カモシカ・オオツノシカ・シカ・イノシシなどの中型動物しか棲息していなかったと云われている。

狩猟は、罠で捕獲することが主であったが、後期旧石器時代の終わり頃より人間に言葉が使われだすと、狩をするにも二三人から数人が共同してするようになり、二つ以上の道具を組み合わせて作った弓矢を狩猟道具として使うようになった。

捕獲した獲物は、当時土器を作る技術がなかったので煮て食することは出来なかった、生食か、又は焼いて食するか、獣肉を葉っぱに包んで蒸し焼きにして食する方法しかなかったと思われる。火は原人時代より使用されていたので、焼く・蒸す事は可能であった。厳しい自然環境の下で生活していた彼らは、常に獲物不足に悩まされ木の実や野生の植物を、生・焼く・蒸す調理方法で食することもあつた。

大所遺跡の出土品を見るに、ナイフ型石器は動物の肉や皮を切る調理用道具。鏃は弓矢の矢先につける狩猟用道具。細石器は主として一個乃至数個を棒に着装して使用する狩猟用道具。此れ等の道具によって大所の旧石器人は、農業を知らない狩猟民であつたことが判る。狩猟民である彼等は、一ケ所に定住することなく、常に移動を考えなければならなかった。一時的にせよ彼等が居住地を定めるには、そこに湧き水があって、森が近くにあり、南向きで常に太陽の恩恵が受けられる条件にかなえられる場所でなければならなかった。

それは当時、水を確保するために竪井戸を掘ることを知らなかったし、河川や湖は増水の危険があり、水を入れる土器も未だ作られていなかったので、涌き水に頼るしかなかったからである。涌き水は年中水量・水温共に殆ど変わらず、夏は冷たく冬暖かいのでその周りには、常にみずみずしい植物が繁茂しており、そこを餌場とする動物。それを狙う人間。涌き水のある所は、人間にとっても動物にとっても生命を維持するための大切な場所であった。

森は動物昆虫の餌場・棲みかであり、人間にとっても、其処に集まる動物昆虫の狩猟の場、食料としての木の実の採集の場であつた。旧石器時代後期は、氷期も終わり

気候は温暖化に向かっていても、冬期の寒さは相当厳しかったと思う、それを防ぐのには、木の柱に草の壁、屋根を草で葺いた小屋、床は天日で乾燥させた草を敷き詰め、其の中で生活していたものと思われる。寒さ厳しいときは、乾燥草の中にもぐって寒さを凌いだものと思う。

生活用品の乾燥と保温には、天日に依存するしかなかったので、南向きの日当たりの良い土地が住居を定める必要条件であった。大所遺跡の地は、西北を小高い丘に囲まれ冬季の西北の寒風は遮られ、東南は遮る物の無い年中を通じて日照の良い地形である。家の中に炉が設けられるようになったのは、今から約一万年前の縄文時代になってからだと云われている。それ迄、火は神聖なものとして個々の家に分火する事なく、集団の酋によって管理され共同で使用されていたものと思われる。

彼等は穀物の栽培や家畜の飼育を知らず、採集と狩猟で食物を確保しており、小動物昆虫の捕獲と木の實の採集等は女の仕事。狩猟は男の仕事とそれぞれ仕事の分担が決められていたとされている。

NHKテレビ六月二四日のプライム一〇で放送された『アルプス氷河のミイラは語る』を参考にして当時のことを想像してみよう。

今から約五五〇〇年前の人間〔日本の縄文人にあたる〕のミイラがアルプス氷河の中から完全な姿で発見された。大所に石器人が住んでいた時代より約四五〇〇年後の事で、此れによって大所の石器人を想像することは出来ないが、参考になると思うので特に記して見る。

発見されたミイラは鹿の皮の衣服を纏い、足には動物の皮の靴を履き、皮のポーチを持っていた。ポーチの中には火打石と木の実がはいっており、付近に銅製の斧と一八〇センチの弓と、作りかけの矢が発見された。衣服には麦の花粉が歯には石臼で摺った穀物がそれぞれ付着していたので、彼は生前アルプスの南側に住んで農耕と牧畜を行っていたと判定された。

彼は家畜を移動させるためアルプス越えの途中、今までの温暖気候が突然急変して寒冷気候となり、防寒に無防備であった彼は凍死、死体は寒風にさらされてミイラとなって氷河に閉じ込められたものだろうと、解説されていた。

この説によると、今から約一万年前より温暖期に向かった地球の気候〔アルプス氷河を草原にした〕は、約五五〇〇年前に再び寒冷期に、その時より約四八〇〇年経過した鎌倉時代〔約七〇〇年前〕には、潮位が高かった事実からすれば地球は温暖期であった事が判る。

以上の事実によれば、石器時代が終わってから現代に至る約一万年間の間氷期に、最初の約四五〇〇年は北半球の氷を溶かした温暖期、その後の約四八〇〇年はアルプスを再び氷河で覆った小規模な寒冷期。鎌倉時代より現在に至る七〇〇年の地球は小規模な温暖期で有ることが判った。

参考資料

別府市周知遺跡一覧表　日本人の起源
日本史探訪　歴史でみる日本
大分の歴史　ジャポニカ大辞典
別府大学文学部公開講座
『東北アジアの旧石器と日本人』

松井文書『立石一件』について

佐藤　曉

慶長五年の石垣原の合戦を記録したものに、『石垣原合戦記』や『細川藩慶長年間記』『黒田如水石垣原軍記』『大友義統公軍記』『石垣原大友義統與黒田如水取合』などの諸本がある。これ等は石垣原に出陣した者が、合戦の後に見聞したことを記録したものか、石垣原合戦に従軍した者からの聞き書きである。これに比して、熊本大学図書館蔵の「松井文書」なかにある『立石一件』は、当時杵築城に在って石垣原に黒田軍と共に出陣した松井佐渡守康之の記録である。巻中には黒田如水・加藤清正や大坂五奉行の書簡が記録されていて、当時の石垣原合戦への情勢がよく理解できる史料である。

筆者は日出町誌編纂の際に、写真資料を入手して解読執筆委員に配布したが町誌には僅かしか記載されなかっ